

カンパニエラの夢



兵庫県マスコット はばタン

兵庫県
公益財団法人兵庫県人権啓発協会

は じ め に

新型コロナウイルス感染の不安が広がる中、感染された方やその家族、濃厚接触者、医療従事者等に対する誹謗中傷やインターネット上での心ない書込などが問題となっています。誰もがお互いの人権を尊重し、支え合う共生社会の実現について考えていかなければなりません。

そのためには、「共生の心」を培う人権意識の高揚を図り、県民一人ひとりが、相手の気持ちや立場を理解し思いやる感性を磨いていくことが大切です。そこで兵庫県では、日常生活の中で人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会をめざす「人権文化を進める県民運動」を展開し、人権尊重の視点に立ったさまざまな施策に取り組んでいます。

本年度のビデオ作品『カンパニュラの夢』のテーマは、「超高齢化社会とひきこもり（8050問題）」です。

内閣府では、平成30年度に初めて40～64歳の中高年を対象にしたひきこもり調査（『生活状況に関する調査』）を実施しました。その結果、全国で中高年のひきこもりは推計61万3千人、このうち半数以上が7年以上ひきこもりを続けていることがわかりました。15～39歳を対象とした若い世代を含めると、ひきこもり当事者は約100万人を超えると推計されます。

現在、長期化、高齢化するひきこもりとともに、中高年のひきこもり当事者とその親が経済的困窮や社会からの孤立（交流の欠如）といった課題を抱えるいわゆる「8050問題」が新たな社会問題となっています。

一方で、超高齢化社会の進展に伴い、各自治体は、高齢者が要介護状態になっても、可能な限り住み慣れた地域で生活できるよう、それぞれの地域の実情に合わせて自宅などで必要な医療・介護サービスを受けられる地域包括ケアシステムの構築を進めています。単身世帯の増加や地域のつながりの希薄化等により家族や地域での互いに支え合う力が低下しているという状況の中では、これまで以上に地域から孤立している人々の声を聞き入れ、地域全体で支える力を再構築することが求められています。

これらの問題を絡めたこの作品が、ご覧になった方々にとって、社会から孤立する「8050問題」の深層と家族の苦悩を受け止め、超高齢化社会における地域のあり方とともに一人ひとりが尊重される社会について考える機会になることを願っています。

令和2年12月

兵庫県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

目次

はじめに

- I 制作のねらい 1
- II 登場人物..... 1
- III 主な場面とセリフ・学習で扱うポイント 2
- IV 学習会を開催するにあたって
 - 1 学習会全体の流れ 8
 - 2 学習展開例 9
 - 3 ワークシート 10
 - 4 解説「超高齢化社会とひきこもり(8050問題)について」 12
 - (1) 用語解説
 - (2) 国や県の動向
 - (3) 生活状況に関する調査
 - (4) 高齢化の現状と将来像
 - (5) 地域包括ケアシステムの実現に向けて
 - (6) 新たな包括的な支援機能等について
 - 5 ひきこもり等に関する相談機関について 15

活用ガイドについて

本書は、人権啓発担当者等が人権啓発ビデオ「カンパニユラの夢」を用いて人権啓発研修を企画・運営し、効果的に進めるための手引きとして作成したものです。

様々な場面で活用され、充実した研修になることを願っています。

I 制作のねらい

作品のテーマは、「超高齢化社会とひきこもり(8050問題)」です。

近年、主に「80代」の高齢の親が「50代」のひきこもりが長期化した子を支えている家庭が増加しています。「8050問題」とは、こうした家庭が地域社会との接点を失い、親子ともども生活が困窮するなどの課題を抱え、将来への展望が見いだせない超高齢化社会における新たな社会問題のことです。

背景には、家族や本人の病気、親の介護、離職(リストラ)、経済的困窮、人間関係など、複合的な課題を抱えながらも、親子共倒れの問題が発生するまでSOSの声を上げることができない、現在の超高齢化社会における「家族の孤立」が地域に潜在化していることがあります。

この作品は、二つの家族の視点で進行します。主人公の岸本麻帆はあることをきっかけに「ひきこもり」は誰にでも起こり得ることだと気づきます。一方、20年以上ひきこもり状態にある谷口誠一とその両親は問題が長期化する中で、解決の糸口すら見いだせないまま苦悩しています。麻帆は谷口家の抱える問題に寄り添い、解決策を求め行動を起こします。

急速に高齢化が進む今、8050問題は誰にでも起こりうることで認識し、地域の人々がひきこもりなどの悩みを共有し偏見をなくすとともに、互いに助け合うことで地域共生社会の実現をめざす人権啓発ドラマを制作します。

II 登場人物

岸本 麻帆 (41)
〈宮地 真緒〉

喫茶店でパートとして働き始める。あることをきっかけに谷口家の抱える問題に寄り添い、行動を起こす。



谷口 誠一 (50)
〈六角 精児〉

20代の頃は営業職として働いていたが、会社倒産と再就職の失敗で20年近く自宅にひきこもっている。



引田 啓介 (45)
〈山田ルイ53世〉

喫茶店「カンパニユラ」の店主。お店を地域の憩いの場にするべく、切り盛りしている。



岸本 絢香 (16)
〈白石 優愛〉

麻帆の娘。バスケット部の活発な1年生。ケガをきっかけに自宅にひきこもりがちになる。



谷口 洋子 (80)
〈福井 裕子〉

誠一の母。息子のひきこもりが長期化することで不安を抱えている。



谷口 徹 (80)
〈峰 秀一〉

誠一の父。夫婦で写真屋を営んでいたが今は年金暮らし。ひきこもりの息子にいらだっている。



今北 翔子 (50)
〈高木 直子〉

主婦。リーダー的存在。ひきこもりについて一方的な考えを持つ。



支援センター職員
山本 貴 (40)
〈竹邑 貴司〉
佐良 美紀 (40)
〈結城 さなえ〉



いうこともあるよってことだね。不貞腐れちゃダメだよ。根性論じゃないけどさ、こういうときこそ気持ち張って頑張らないとね」



絢香 「うん」

8 岸本家 勝手口（夜）

勝手口から家の裏に出て、家庭ゴミの処理をしている麻帆。谷口家から怒鳴り声とともにガラスの割れる音と悲鳴が聞こえる。

麻帆 「！……」

9 谷口家の前の道（翌日）

洋子 「岸本さん？」

洋子 「どうされました？」

麻帆 「……こんにちは」

洋子 「何か御用？」

麻帆 「あ……いえ」

洋子 「庭のことかしら。植木が出ちゃってるでしょ、ごめんなさいね」

麻帆 「それは、大丈夫なんですけど……」

洋子 「……？」

麻帆 「夕べ、音が」

洋子 「ああ、ごめんなさいね…」

麻帆 「大丈夫ですか？」

洋子 「大丈夫です、大丈夫ですから」

麻帆 「いや、でも……」

麻帆 「あの……よかったらうちでお茶でもいかがですか」

洋子 「……」



10 岸本家 居間

洋子 「……20年以上経つのかな。こんなに長いことになるなんて思ってなかったわ……若い頃はあの子も普通に働いてたんですもの」

麻帆 「お仕事、辞められたんですか」

洋子 「勤めてた会社が倒産したの」

麻帆 「……」

洋子 「すぐに再就職に向けて活動もしたけど、上手いかなかったみたいなの」

麻帆 「就職氷河期ですよ。バブルが崩壊してからしばらく続いて。うちの兄も苦労してました」

洋子 「資格をね、何も持ってなかったこと、色んな所で面接官に嫌味言われたらしくて……仕事で必要になってくるから、

パソコン勉強するんだってそれで部屋にこもって。それからずっと……傷ついたんでしょね……昔は営業で頑張ってたのよ。高校の頃なんか野球部のキャプテンもやって」



麻帆 「そうだったんですか……それで、昨日は？」

11 谷口家 居間（回想）

徹 「母さん、この家出てくぞ」

洋子 「えっ？」

徹 「俺らが出ていきゃあ、あいつだって食うものに困ってなんとかするだろ」

洋子 「でも、どうやって」

徹 「どっか施設でも入りゃいいだろ」

洋子 「そんな余裕、うちにはないですよ」

徹 「そんなこと言うけどな、俺らな、いつまであいつの面倒を見なきゃなんないんだよ。ええ？わかるだろ！」

洋子 「お父さん」

誠一が部屋の横で、会話を聞いていたことに気が付く洋子と徹。

徹 「おい。何してんだよ。出てけ」

誠一 「……」

徹 「出てけったら、出ていけ」

誠一 「……」

徹 「ここはな俺が働いて建てた家だ。お前が住む権利なんかない。わかるだろ、え！？出ていけ」

コップが床に落ちて割れる。洋子、悲鳴をあげる。

徹 「いつも言ってるだろ！出ていけ！……」

誠一、居たたまれない表情でその場を去っていく。



12 岸本家 居間

洋子 「写真屋をやっていた頃はね、手伝ってもらおうかと私は思ったけど、お父さんともうまくいなくなってる」

麻帆 「働きたいとか、そういうお気持ちはあるんでしょうか」

洋子 「まあ、あの子なりに両親に迷惑かからないようにって思ってるんだろうけど……わからないわ……何考えてるのか……わからない。もう疲れちゃった」

麻帆 「……」

* * *



麻帆 「ひきこもり地域支援センター……こういうのがあるんだ」

絢香 「ただいま」

麻帆 「お帰り。あれ、部活は？」

絢香 「出来ないよ。まだ治ってないもん」

麻帆 「でもメンバーの応援とかあるんじゃないの……最近毎日すぐ帰ってくるけど、どうしたの？」

絢香 「……」
去ってしまう絢香。



13 絢香の部屋

麻帆 「絢香、入るよ」

絢香 「……」

麻帆 「絢香何してんの、ちょっと、聞いてる？」



絢香のヘッドフォンを外そうとする麻帆。

絢香 「ねえ何すんの！？ダルいんだけど」

麻帆 「だから何してんのかって聞いてるの。怪我が治ったらすぐに練習復帰できるようにしとかなないと。2年になったらレギュラー目指すんですよ。怪我したくらいで諦めてどうすんのよ」

絢香 「……くらいって言った？」

麻帆 「へ？」

絢香 「怪我したくらいって言った？……出たって……出たって」

ヘッドフォンを再びつけて、背を向ける絢香。

麻帆 「ごめん」

14 ひきこもり地域支援センター（数日後）

佐良 「なるほど。まずはご相談いただきありがとうございます。ご自身の状況を認めたくないという思いから、ここに相談にさえ来られないご家族も多いです」

山本 「誠一さんは、買い物などはご自身でもされてるんですね？」

洋子 「夜になってからですけど、一人で……何を考えてるのか、親の私にもよくわからないんです」

山本 「ひきこもっていらっしゃる方は、たいいていある種の生き辛さを感じていらっしゃると思います。例えば今の社会は『明るく社会的であること』が好ましいとされがちなんですけど……一度躓いて自信を無くしている人は、そう簡単には

出ていけませんから」

洋子 「じゃあ、どうすればいいんですか。あの子は何を言ったって響かないんです。私が悪いのか、あの子が悪いのかわかりません。でも、ずっと、もうずっとずっと苦しんできました」

山本 「ご本人の言葉を一つ一つ、焦らずに時間がかかります」

洋子 「いえ、私達には時間がないんです、介護だって必要になるかもしれないし、なにより私たちが死んだら、あの子はどうなるんですか？」

山本 「……」

洋子 「もう……何もかもが心配で、心配で」

山本 「お気持ちわかります……が、解決した例はたくさんあります。決して焦らず、一緒に取り組ませてください」



15 ひきこもり支援センター ロビー

麻帆 「どうでした？」

洋子 ^③「色々話を聞いてもらえて、ちょっと心が軽くなったような気がするわ」

麻帆 「ほんとですか？」

洋子 「スマホもパソコンもやらないから、こういうところの情報がなくて、ほんとにありがとね」

麻帆 「いえ、まずは第一歩ですね、良かったです」



16 谷口家 居間(夕)

洋子 「どうかねえ、考えてみてくれない？良さそうな人たちだったよ。新しい働き口についても、就労っていうの？親身に相談に乗ってくれると思うよ」

誠一 「……」

洋子 「どう？」

誠一 「いいよ」

洋子 「どうして？」

誠一 「いいって！就労たってさ、どんなとこだかわかんないだろ。なんでそんなとこに頼らないといけないんだよ」

洋子 「だけど……」



17 岸本家 居間 (夜)

麻帆 「ええ……まだ本人の体調が悪いみたいで」
担任の声 「もう1週間も学校
に来られてないで
すけど、大丈夫
ですか？」



麻帆 「明日には行ける
ようになるかもしれないんですけど」

× × ×

椅子に座り、頭を抱える麻帆。

18 絢香の部屋 (夜)

麻帆 「絢香、入るよ」

麻帆 「絢香、……この前はごめんね……お母
さん、間違ったこと言ったと思う。辛
い思いしてるのに……ごめん……」

絢香 「自分がいなくても……普通にチームが
回ってて……自分なんかいる意味ない
じゃんって思って……それが辛くて」

麻帆 「いる意味ないなんて、そんなことない
よ……でも……

辛い思いしてま
で頑張らなくて
いいから。絢香
のやりたいよう
にやって」



どちらからともなく、肩を抱き寄せ合う2人。

19 喫茶「カンパニユラ」(翌日)

麻帆 「自分がいる意味を感じたい、誰かに必
要として欲しい、自分の居場所が欲しい、
娘はそう強く感じてるんじゃないかな
って」

洋子 「誠一も……同じようなこと考えてるの
かもね」

麻帆 「誰だってそうですよね。私だってき
つとそういうのがあったから、ここで働
き始めたんだと思うし」

引田 「岸本さんはさ、ほんとに居てくれて良
かったと思ってるよ。というか、大助
かり。何とんでもお店が明るく華や
かになるらしいからね。いやいや、あの、
モッチャリって、ね、モッチャリ店長
っていわれてて」

麻帆 「ああ、気にしてたんですか」

引田 「いやいや、気にしないなのよ。」

引田 「中学校の時もさ、ちょっと学校に行け
なくなった時期があったんですよ。授
業中に、オナラしちゃってね。そっか
らそういう感じのあだ名がつくじゃな

いですか。あれがキツかったなあ。思
えばそこからずっとフラフラ生きてる
ような気がします……就職も乗り遅れ
ちゃったし」

麻帆 「何か……意外ですね」

引田 「うーん、根拠のない自信はあったん
ですよ。ただ気が付いたら社会から取
り残されてて。なんかもう生きてても仕
方ないのかなと思ったり、あれは辛か
ったですね……たぶん人って、自分が
必要とされてるって実感したいんだと
思うんですよ」

麻帆 「何か……出来ることはないのかな」

20 公園 (夜)

絢香 「すみません」

絢香 「ありがとうございます」

絢香 「あ……松葉杖
ついてやるもん
じゃなかったで
すね」



ボールを手渡す誠一。

誠一 「頑張ってるね……いや、頑張らなくて
いいかもしれないけど……頑張ってるね……
じゃあ」

21 喫茶「カンパニユラ」(数日後)

引田 「ほら……わかる？ここに映ってらっし
やる皆さん、全員引きこもりの方なん
です」

麻帆 「ええっ…？」

引田 「ひきこもっ
てる人たちが集
まって、ただ雑
談するっていうイベントなんだけど、
時々、今もうひきこもりじゃないよ、
ひきこもりを脱したよって方もお招き
して、どうやって社会に出れたかって
いうのを話してもらったり」



麻帆 「なるほど……引きこもっている方を、
④ 今すぐ就労に繋げようとか、そういうんじ
ゃないんですね」

引田 「そう。そういうのはね、一番ダメみた
い。これはいうなればひきこもりオフ会。
話す中で誰かに攻撃される心配もない
し、参加もしやすい、こういうのがさ、
ホントに俺の中学時代に近くでやって
たらなって思うよ」

麻帆 「店長？」

引田 「うちでもやってみようと思うんだ。どう、手伝ってくれない？」
 麻帆 「……もちろんです！じゃ、支援センターの人にも、声をかけてみますね！」
 引田 「じゃあ俺は、SNSとかブログで募集するよ！」
 麻帆 「はい！」

22 谷口家 居間

洋子 「誠一、あのね……近所の喫茶店で、イベントが始まるらしいの。イベントっていてもみんなが集ってっていう会だけど」
 誠一 「……」

23 喫茶「カンパニユラ」

イベントが行われている。

引田の話をしている参加者たち。

引田 「僕の場合は中学1年の時だったんですけど、もともとお腹が弱い子どもだったんですね。すぐお腹が痛くなっちゃう子で」



参加者 「ああ、わかります」

引田 「わかる？」

参加者 「私もなんです」

引田 「休み時間のたんにトイレに行きたいんだけど、小学生のときって何かトイレに行くのが恥ずかしいみたいな」

24 喫茶「カンパニユラ」店の外

麻帆 「こんにちは」

今北 「今日はどうしたの？」

麻帆 「ああ、ちょっとしたイベントを」

今北 「イベント？イベントだって」



25 谷口家 誠一の部屋(夕)

SNSで、喫茶カンパニユラでの『喫茶ゆっくり』のことを検索している誠一。

『答えを見つけるのに時間がかかってもいい。年齢も関係ない。がんばらなくてもいい。みんなと楽しく過ごすだけでいい。 by 元ひきこもりの店長』

26 喫茶「カンパニユラ」(2週間後)

第2回が行われている。

今北 「これ、普段皆さん、引きこもってらっしゃる方？」

麻帆 「どうですか？」

今北 ^⑤「思ってたのと……違うわ」

麻帆 「こういう問題って全然自分には関係ないと思ってたんです。でも……どんな家庭にも……うちにだって可能性はあるって気づいたんです」

27 谷口家 居間

洋子 「ありがとね」

誠一 「ん？」

洋子 「私が病気してからかな、お花に水をあげてくれて。そのじょうろ、お父さんが子どもの頃買ってくれたやつでしょ。どっから出してきたの」



誠一 「急にどうしたの」

庭へ出て行こうとする誠一。

誠一 「あのさ……、この前言った、なんだっけ、あの喫茶店のやつ」

洋子 「ああ……」

誠一 「あれ、なんだかわかってないんだけど、母さん行ってんの？」

洋子 「いいえ。誘ってもらってはいるけどね」

誠一 「そう……」

洋子 「気にしないで良いからね」

誠一 「なにを？」

洋子 「いろいろ。お父さんのことも、気にしないで良いから。ああいう人だから、ああだけど。なんであんな言い方になるんだろうねえ」

誠一 「気にしてないよ」

誠一 「俺の考えてることとか、こういう状態とか……」

理解されにくいのはわかってるから、まあ……理解されない上に押し付けられると辛いけど。ただ、迷惑を

かけずに普通に生きていきたいだけなんだけどな……普通に、できれば……楽しく」



洋子 「……」

28 喫茶「カンパニユラ」(1ヶ月後)

第5回が行われている。

喫茶店の前で、中に入るのを躊躇している誠一。

麻帆 「いらっしゃいませ、どうぞ」

麻帆に導かれ、店内に入る誠一。

今北 「こんにちは。どうぞ」

× × ×

参加者「あの、今日ちょっと暑かったですよね」

誠一 「そ…そうですね……」

麻帆 「谷口さん、谷口さんってWEB関係お詳しいんですよね」

誠一 「え？私ですか？
いやいや……そんな」



麻帆 「実はこのイベントのサイトを作ろうと思ってるんです。もっと色々な地域の方に参加してもらえたらなって」

誠一 「はあ、それはそうですねえ」

麻帆 「それで、もしよかったら、手伝っていただけませんか？少しですけど謝礼も出せそうなんです。出来れば大丈夫なんですけど」

誠一 「いやあ、そういうのは……」



麻帆 「じゃあ、考えておいてください」

29 谷口家 誠一の部屋

いそいそ部屋に入り、パソコンの前に座る誠一。

新しいPCの本を買ってきたようで、それを袋から出しながら、前のめりでキーボードを打ち始める。

30 谷口家 庭(半年後)

誠一が育てていた苗に、花が美しく咲いている。小さくても、その場でしっかりと咲き誇っている。



31 谷口家 台所

徹 「なんだ、これ」

机の上に一枚の紙がプリントアウトされている。

『カメラ講習会 企画書』の文字。

誠一 「近所の喫茶店。俺がたまに行ってるよこの」

徹 「ああ」

誠一 「店長がそういうのやりたいんだって。親父がカメラマンだって話したら」

誠一 「良かったら……考えてみて」

徹 「……」

32 岸本家 玄関

絢香 「行ってきます」

麻帆 「行ってらっしゃい」

絢香 「うん。今日ちょっと遅くなるよ。月曜も自主練になったからね。じゃ行ってきます」

麻帆 「行ってらっしゃい!気をつけてね」

33 岸本家の前の道

絢香 「……よし」

綾香の次に歩く誠一の姿。



34 谷口家 居間

徹、棚からカメラを取り出してきた様子。

徹 「……古いからなあ」

入念に、カメラを調べている様子の徹。



35 喫茶「カンパニユラ」

歩く誠一を窓越しに見かけ、心の中で励ます麻帆。

手元のノートパソコンには、誠一が作った店のWEBが開かれている。カンパニユラの花のイラスト。



36 道

足取りは不慣れだが、前を向いて歩く誠一。
(終)



Ⅳ 学習会を開催するにあたって

1 学習会全体の流れ

学習会を始める前に、計画や運営の面でどのようなことに注意していくとよいか、基本的な内容についてチェックしてみましょう。

【準備】

- 学習のねらいが、はっきりしている。
- 学習内容は、学習者が知りたいことである。
- 実施時期や時間、場所は、学習者に無理のない設定である。
- 指導者や講師は、ねらいや内容の点から適任である。
- 学習方法は、講義や討論、ビデオ視聴など学習者や内容に合わせて決めている。
- 資料や機材等の確認ができています。
- 前回の改善点を生かしている。

効果的な学習会にするための最大のポイントは、ねらいの明確さです。学習内容や指導者（講師）選択は、しっかりとしたねらいに沿って決める必要があります。また、事前に指導者（講師）と打合せを行い、担当者の考えを伝えておきます。話し合いをする場合、身近で、だれもが知りたいと感じているテーマを扱うことで、意見が活発に交換され、充実した気づきの場となります。

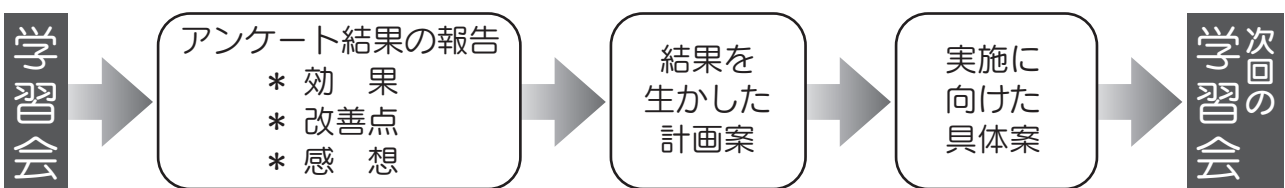
【実施】

- 円滑な進行をめざして、シナリオ（進行手順）を作成するなど工夫している。
- ワークシートを、学習者が考えを整理するための資料として活用している。
- 話しやすい雰囲気づくりを心がけ、プライバシー厳守や他者を批判しないなど話し合う際のルールが共有できている。
- 実施中に学習者の様子を観察するなど、評価の視点を取り入れている。
- アンケートに、理解の程度や内容に関する項目、自由記述などを入れている。

学習会を成功させるには、全体の流れがイメージできていることが重要です。受付や挨拶、講演や討論の質疑応答などの時間配分も含めて、計画に沿って進めていきます。話し合いをする場合、学習者同士の関わりによって新たな気づきが生まれるので、学んだ効果を発表し合うなど、振り返りの機会を持つことが大切です。学習者が、「聞く」「見る」「話す」「作る」など、変化のある活動ができるように心がけます。

【実施後】

- アンケート結果を、効果があった点と改善点とに分けてまとめ、報告する。
- アンケート結果をもとに、次回の学習会に向けた計画案を作成する。



〈学習者の視点を大切に〉

- ◎学習者に新たな気づきがあったか。
- ◎学んだことが日常生活につながっているか。

2 学習展開例

60分の住民学習を想定しています。参加者の人数や使うことのできる時間によって、時間の割り振りや話し合う項目の数を調整し、無理のない学習を行いましょう。

ワークシート1(P10)は、参加者がグループを作って学習を行う場合に、ワークシート2(P11)は、個人作業を中心に学習を行う場合に活用できるシートです。参加者の状況に応じて修正を加えながら、より学習に役立つものにしてください。※90分以上の場合は、4人程度の少人数によるグループワークを適宜取り入れて実施することをお勧めします。

学習のねらいと関連する下線部

1 超高齢化社会とひきこもり(8050問題)に対する理解を進め、一人ひとりの生き方を尊重し、共に生きていくことについて考える。

- ・P2①「心配よねえ。気を付けて。事件とか、そういうのあるとかって聞くから」(今北の発言)について考えてみましょう。 <ワークシート1>
- ・P3②「若い頃はあの子も普通に働いてたんですもの」(洋子の発言)から、誠一がひきこもった経緯と当時の社会背景を含めて考えてみましょう。 <ワークシート1>
- ・ひきこもり当事者と家族の状況について理解しましょう。 <ワークシート2>
- ・P4③「……色々話を聞いてもらえて、ちょっと心が軽くなったような気がするわ」(洋子の発言)から、谷口家についてわかることがありますか。また、その背景について考えてみましょう。 <ワークシート1・2>
- ・P5④「今すぐ就労に繋げようとか、そういうんじゃないんですね」(麻帆の発言)から、ひきこもり当事者には何が必要なのか考えてみましょう。 <ワークシート1>
- ・今北の考え方がP2①からP6⑤のように変化したのはなぜか考えてみましょう。 <ワークシート1>

2 地域共生社会をめざして、私たちが日常生活の中で心がけることを考える。

- ・地域で孤立し支援を必要としている人に対してあなたができることを考えてみましょう。 <ワークシート1>
- ・地域住民として、あなたが考える地域共生社会(P.12参照)とはどのようなものですか。ビデオに描かれたひきこもりの子を抱え苦悩している家族を一例とし、地域で孤立し支援を必要としている人に対してあなたができることは何か考えてみましょう。 <ワークシート2>

学習活動		学習活動を支援するポイント	
1 開会 (3分) ・学習のねらいと流れを知る		<始める前に> 学習活動4(意見の交換)をグループで行う場合は、参加者の着席状況を見て、席の移動をお願いする。 ○すべての学習のねらいを扱うことはできないので、参加者に特に必要と思われるものを選択する。	
2 ビデオの視聴 (36分)		○学習活動3(ワークシートの記入)でどちらのワークシートの何番の間を使うかを決め、事前に2ページからの「主な場面と台詞・学習で扱うポイント」を使い、注意して視聴するポイントを学習者に伝える。	
3 ワークシートの記入		【ワークシート1】	【ワークシート2】
【ワークシート1】 ・指定された問を記入する(5分)	【ワークシート2】 ・できるだけ具体的に記入する(10分)	○ワークシートの問をすべて扱うことは時間的にできないので、ビデオの視聴の前に伝えたポイントに該当する問と、時間に余裕があれば扱いたい問を記入してもらう。	○実際に身の周りの生活を振り返って、具体的な事例について考える作業になるので、見せ合ったりせず、じっくりと考えて記入してもらう。
4 意見の交換		○グループでの話し合いの様子を見ながら、全体の前で意見を発表してもらうペアを選び、事前に発表者をお願いしておく。	○記入の際に、事前に発表者を数名お願いしておく。
・グループでの話し合いの後、全体で意見を聞く(12分)	・全体で話を聞く(7分)		
5 まとめ (4分)		○解説(P12-P15)を使って、超高齢化社会や8050問題、地域共生について基本的な説明や相談窓口等について説明する。	

3 ワークシート

■ ■ ■ ワークシート1 (グループ) ■ ■ ■

カンパニユラの夢

※ビデオ視聴前に、研修講師（指導者）から、どの問いについて取り上げるかを聞きましょう。
ワークシートの記入は、話し合いをスムーズに進めるためのメモと考え、お書きください。

1 ひきこもりに対するイメージについて

- (1) P2①「心配よねえ。気を付けて。事件とか、そういうのあるとあって聞くから」（今北の発言）について考えてみましょう。

- (2) P3②「若い頃はあの子も普通に働いてたんですもの」（洋子の発言）から、誠一がひきこもった経緯と当時の社会背景を含めて考えてみましょう。

- (3) P5④「今すぐ就労に繋げようとか、そういうんじゃないんですね」（麻帆の発言）から、ひきこもり当事者には何が必要なのか考えてみましょう。

- (4) 今北の考え方がP2①からP6⑤のように変化したのはなぜか考えてみましょう。

2 ひきこもりの子を持つ抱える家族の状況について

- (1) P2 | 玄関での洋子と徹の会話から谷口家の状況を考えてみましょう。

- (2) P4③「色々話を聞いてもらえて、ちょっと心が軽くなったような気がするわ」（洋子の発言）から、谷口家についてわかることがありますか。また、その背景について考えてみましょう。

3 地域共生社会について

地域で孤立し支援を必要としている人に対してあなたができることを考えてみましょう。

■■■ ワークシート 2 (個人) ■■■

カンパニユラの夢

※ひきこもりと 8050 問題をもとに、超高齢化社会における地域共生社会として何が必要か考えてみましょう。

1 ひきこもり当事者と家族の状況について理解しましょう。

(1) 誠一がひきこもりとなった原因と絢香が学校に行けなくなったきっかけは何でしたか。

(2) 誠一の様子について、ビデオ鑑賞の前にあなた自身が描いていたひきこもっている人のイメージと違いがあれば書いてください。

(3) P4③「色々と話を聞いてもらえて、ちょっと心が軽くなったような気がするわ」(洋子の発言)から、谷口家についてわかることがありますか。また、その背景について考えてみましょう。

2 地域住民として、あなたが考える地域共生社会 (P.12 参照) とはどのようなものですか。ビデオに描かれたひきこもりの子を抱え苦悩している家族を一例とし、地域で孤立し支援を必要としている人に対してあなたができることは何か考えてみましょう。

4 解説「超高齢化社会とひきこもり(8050問題)について」

(1) 用語解説

ひきこもり

様々な要因の結果として、社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職員を含む就労、家庭外での交遊）を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を示す現象概念。

（参考：厚生労働省「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」）

8050問題

ひきこもる中高年の未婚の子(50代)と高齢の親(80代)が同居する家族の困難を言う。

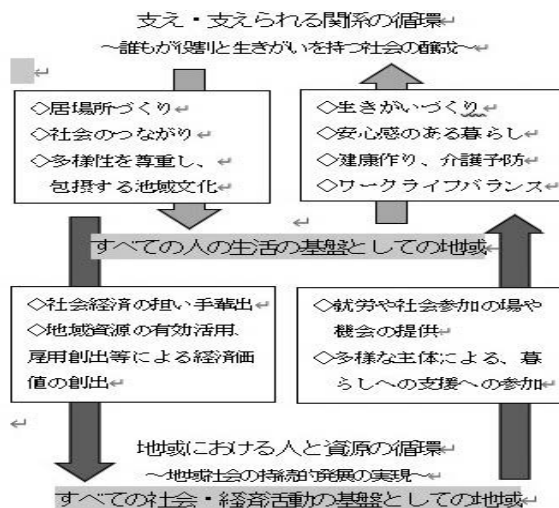
背景には、ひきこもりの長期化・高年齢化、生涯未婚率の上昇、現役世代の雇用の劣化による親子の経済力の逆転、親の病気や介護のための離職など、日本の様々な課題が折り重なっている。

「老老介護」「高齢者の独居世帯」と異なり、外見上は現役世代の子どもが同居していることから、孤立や困難が見えにくく、支援のはざまに落ち込みがちとされる。

（参考：「朝日キーワード2021」より抜粋）

地域共生社会

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として、参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創って行く社会。



（参考：厚生労働省「地域共生社会推進検討会」資料より修正）

(2) 国や県の動向

ひきこもり地域支援センター設置運営事業

（平成21年度～）

本人や家族が、地域の中で最初にどこに相談したらよいかを明確にし、支援に結びつきやすくすることを目的に、ひきこもりに特化した第一次相談窓口としての機能をもつ「ひきこもり地域支援センター」を、全国の都道府県・指定都市に設置し運営を進めている。

子ども・若者育成支援推進法(平成22年施行)

教育、福祉、雇用など各関連分野にわたる施策を総合的に推進するとともに、ニート、ひきこもりなどの困難を抱える若者への支援を行うための地域ネットワークづくりの推進を図っている。

ひきこもりサポート事業（平成30年度～）

市町村において、ひきこもり支援の基盤を構築し、ひきこもり状態にある方の状況に応じた社会参加に向けた支援を図るため、ひきこもり支援に関する相談窓口の周知やひきこもりの実態把握、ひきこもり状態にある方やその家族が安心して過ごせる居場所づくり、ひきこもりサポーターの派遣等を行う。

就職氷河期世代活躍支援プラン

（厚生労働省 令和2年）

1990年代～2000年代の雇用環境が厳しい時期に就職活動を行った世代を就職氷河期世代と呼び、希望する就職ができず、様々な課題に直面している方が多数います。

厚生労働省では、就職氷河期世代の方々の、就職・正社員化の実現、多様な社会参加への実現を目指した支援プランを策定しました。新たに地域ごとのプラットフォームを設けるため、「ハローワーク」「地域若者サポートステーション」「ひきこもり地域支援センター」「自立相談支援機関」等の地域基盤を活用し、民間支援機関等との連携を図りながら、地域一体となって支援を行います。

支援が必要なすべての方に対し、それぞれの状況に合わせたきめ細かな支援が届くよう就労のみならず居場所づくりなど社会参加の支援を行います。

地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律(施行 2021年4月1日)

地域共生社会の実現を図るため、地域住民の複雑化・複合化した支援ニーズに対応する包括的な福祉サービス提供体制を整備する観点から、市町村の包括的な支援体制の構築の支援、地域の特性に応じた認知症施策や介護サービス提供体制の整備等の推進、医療・介護のデータ基盤の整備の推進、介護人材確保及び業務効率化の取組の強化、社会福祉連携推進法人制度の創設等の所要の措置を講ずることを趣旨に改正。

第4期兵庫県地域福祉支援計画

(計画期間：2019年度～2023年度)

基本目標

多様なつながりが創るユニバーサル兵庫

年齢、性別、障害の有無、言語、文化等の違いに関わりなく、全ての人々が地域共生社会の一員として包摂され、多様なつながりの中で互いがかけがえのない人間として尊重し合う社会づくりをめざす。

- 1 地域住民や地域団体等から構成されるネットワークの構築
- 2 包括的な相談支援体制の構築
- 3 地域福祉を推進する人材育成
- 4 地域づくり活動の活性化
- 5 地域福祉の推進基盤の強化

ひきこもり総合支援センターの開設

(令和元年 12月)

ひきこもりの本人及びその家族等に対する段階に応じたきめ細やかな支援を行うため、兵庫県精神保健福祉センター内に「兵庫県ひきこもり総合支援センター」を設置した。電話相談、来所相談に加え、令和2年6月からひきこもり状態にある方が利用できる「居場所」を開始。

出かけることが心配、人とかかわることに不安がある方が自分のペースで過ごせるよう心がけている。



(3) 生活状況に関する調査(内閣府：平成30年度)

内閣府では、これまで、平成21(2009)年度と平成27(2015)年度に、満15歳から満39歳までの者を対象にひきこもりの実態調査を実施してきているが、両調査の結果を比較したところ、ひきこもりの状態となつてから7年以上経つ者の割合が増加しており、ひきこもりの長期化傾向がうかがわれた。

そこで、青年期以降のひきこもりの実態を調査することにより、青少年期の生活がその後の生活に及ぼす影響等を明らかにし、青少年の育成支援に係る諸施策の企画・立案に役立てることを目的に、平成30(2018)年度において、初めて満40歳から満64歳までの者を対象とするひきこもりの実態調査を、「生活状況に関する調査」として実施した。

(ア) 広義のひきこもり群の出現率及び推計数

※調査対象

平成30年度調査：

満40歳から満64歳までの4,235万人

平成27年度調査：

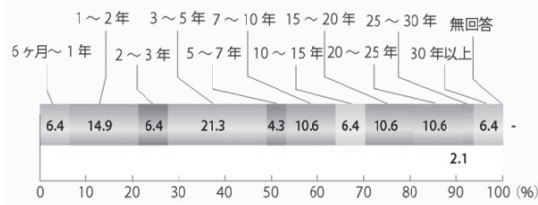
満15歳から満39歳までの3,445万人

調査対象および調査年度	全国の推計数(万人)	
	満15歳～39歳 (H27年度調査)	満40歳～64歳 (H30年度調査)
ひきこもり群 ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する	36.5	24.8
狭義のひきこもり群 ・ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける ・自室からは出るが、家からは出ないまたは自室からほとんど出ない	17.6 (内訳)	36.5 (内訳)
	12.1	27.4
	5.5	9.1
広義のひきこもり群(計)	54.1	61.3

調査時期や手法の違いから単純合計はできないが、満15歳から満64歳までの広義のひきこもり群の総数は100万人以上になると推計される。

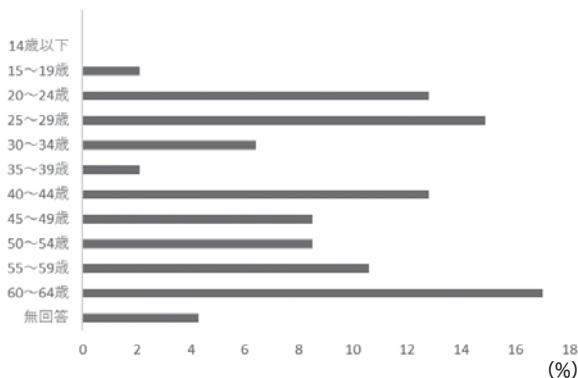
(イ) ひきこもりの状態になってからの期間

広義のひきこもり群の者がひきこもりの状態になってからの期間は、3～5年の者の割合が約21.3%と最も高かったが、7年以上の者の割合が5割近くを占めており平成27年度調査より高い。



(ロ) 初めてひきこもりの状態になった年齢

広義のひきこもり群の者が初めてひきこもりの状態になった年齢は、30歳代の者の割合が若干低かったものの、15歳から24歳までの者の割合が6割を超えていた平成27年度調査の結果とは異なり、全年齢層に大きな偏りなく分布していた。



(I) ひきこもりの状態になったきっかけ

広義のひきこもり群の者がひきこもりの状態になったきっかけは、「退職したこと」、「人間関係がうまくいかなかったこと」、「病気」、「職場になじめなかったこと」であった。

(平成27年度調査では：「不登校」と「職場になじめなかった」の順に多かった)

	満15歳～39歳 (H27年度調査)	満40歳～64歳 (H30年度調査)
1	不登校	1 退職したこと
2	職場になじめなかった	2 人間関係がうまくいかなかった
3	就職活動がうまくいかなかった	3 病気
	人間関係がうまくいかなかった	4 職場になじめなかった
5	病気	5 就職活動がうまくいかなかった

(4) 高齢化の現状と将来像

(参考：内閣府 令和2年度版高齢社会白書)

我が国の総人口は、令和元(2019)年10月1日現在、1億2,617万人となっている。

65歳以上人口は、3,589万人となり、総人口に占める割合(高齢化率)も28.4%となった。

65歳以上人口は、「団塊の世代」が65歳以上となった平成27(2015)年に3,387万人となり、「団塊の世代」が75歳以上となる令和7(2025)年には3,677万人に達すると見込まれている。

その後も65歳以上人口は増加傾向が続き、令和24(2042)年に3,935万人でピークを迎え、その後は減少に転じると推計されている。

総人口が減少する中で65歳以上の者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、令和18(2036)年に33.3%で3人に1人となる。令和24(2042)年以降は65歳以上人口が減少に転じても高齢化率は上昇を続け、令和47(2065)年には38.4%に達して、国民の約2.6人に1人が65歳以上の者となる社会が到来すると推計されている。総人口に占める75歳以上人口の割合は、令和47(2065)年には25.5%となり、約3.9人に1人が75歳以上の者となると推計されている。

(5) 地域包括ケアシステムの実現へ向けて

(参考：厚生労働省 地域包括システム)

団塊の世代(約800万人)が75歳以上となる2025年(令和7年)以降は、国民の医療や介護の需要が、さらに増加することが見込まれています。

このため、厚生労働省においては、2025年(令和7年)を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築を推進しています。

今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の地域での生活を支えるためにも、地域包括ケアシステムの構築が重要です。

人口が横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、高齢化の進展状況には大きな地域差が生じています。

地域包括ケアシステムは、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが求められています。

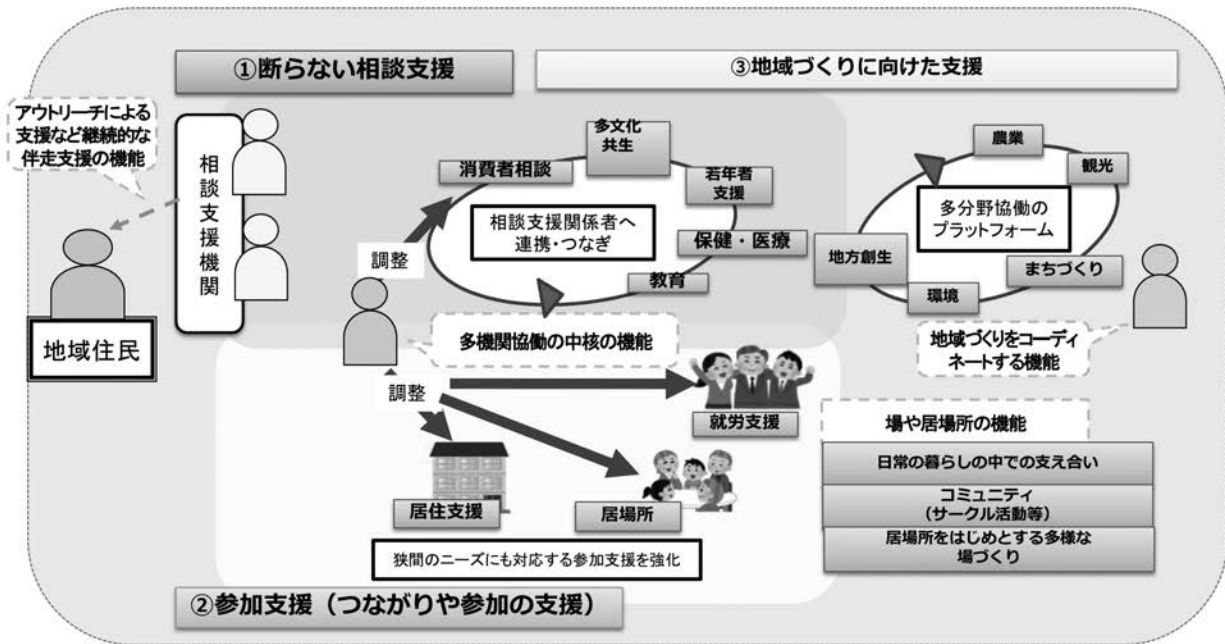
(6) 新たな包括的な支援の機能等について

(参考：厚生労働省「地域共生社会推進検討会」資料)

市町村がそれぞれの実情に応じて包括的な支援体制を整備するため、以下の支援を一体的に実施する。

①断らない相談支援 ②参加支援(社会とのつながりや参加の支援) ③地域づくりに向けた支援

本事業全体の理念は、アウトリーチを含む早期の支援、本人・世帯を包括的に受け止め支える支援、本人を中心とし、本人の力を引き出す支援、信頼関係を基盤とした継続的な支援、地域とのつながりや関係性づくりを行う支援である。



〔厚生労働省資料を修正〕

5 ひきこもり等に関する相談機関について

○全国

■よりそいホットライン

(一般社団法人 社会的包摂サポートセンター)

どんな困りごとや悩みも相談できるライン

フリーダイヤル つなぐ ささえる
0120-279-338

○兵庫県 (相談料無料)

■兵庫ひきこもり相談支援センター

ほっとらいん相談

(対象：青少年を中心とする全年齢)

078-977-7555

■兵庫県ひきこもり総合支援センター

ひきこもり電話相談

(対象：中高年等を中心とする全年齢)

078-262-8050



新型コロナウイルス感染症については、
正確な情報を入手し、人権侵害につながることをのまないよう、
冷静な行動をお願いします。



令和2年 12月 発行

兵庫県健康福祉部社会福祉局人権推進課

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL(078)362-9135 FAX(078)362-4266

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003 神戸市中央区山本通4丁目22番15号
TEL(078)242-5355 FAX(078)242-5360
URL <http://www.hyogo-jinken.or.jp>

複写＜転載＞について

人権啓発ビデオ活用ガイド及びパッケージ、チラシについて、複写＜転載＞される場合は、当協会に申請が必要となります。詳しくは当協会HP (<http://www.hyogo-jinken.or.jp>) をご覧になるか、当協会までお問い合わせください。

